

八戸平和病院 移動型陰圧ボックス導入

車いすのまま検体採取

八戸

八戸市の八戸平和病院(濱田和一郎院長)の依頼を受け、八戸工業大学と地元企業2社が共同で開発を進めてきた、車いすの患者がそのまま中に入れる移動型のPCR検体採取ボックス(陰圧ボックス)が完成し、同病院で運用が始まった。外部へのウイルス飛散を防ぐ換気装置を搭載し、新型コロナウイルス感染者を隔離して安全に移動することができる。同病院は、医療スタッフや他の患者への感染防止に役立てたいとしている。

(千葉真由美)

八工大と地元2社 共同開発



移動型検体採取ボックス内の患者から検体を採取する手順を説明する佐藤医師⑥

「BOXer Type move(ボクサータイプ・ムーブ)」と名付けられたボックスは材質がステンレスと透明の塩化ビニールで、全長と高さが約1・6メートル、幅約1メートル、重さ約100キロ。定員は大人1人。後方には車いす用の折り畳み式スロープが付いている。ボックスの左右にはビニール手袋を装着する穴が

二つあり、医療スタッフが外から両手を入れて患者から検体を採取できる。病院側の要望で、点滴をつり下げるフックや酸素吸入のチューブを通す穴も付いている。

開発は八工大工学部の浅川拓克准教授と金属加工業の大和エンジニアリング(同市、馬場幸男社長)、医療事業のコーデイナーを手がけるサクス八戸営業所(同市、田高昭人所長)が約1年前から着手。学生も設計などに携わり、同大4年の駒井南海さん(22)は「地域医療に貢献できて光栄」と語った。

同病院では4月中旬からボックスの運用を始め、既に検体採取時などに活用している。佐藤正昭医師は「コロナとは別の感染症患者の移送や、院外の別施設に持ち込んでも利用できる。こちらが思っていた以上に良いものを作っていただき、ありがたい」と感謝した。

※ 「この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです」